

造形表現に関する演習授業の改善について

Improvement of Artistic Expression Class for Early Childhood Education

キーワード：保育内容、美しさ、保育者養成

Keywords: Childcare Content, Beauty, Train Child care

渡邊 洋

WATANABE Hiroshi

Abstract

For the purpose of improving classes, a survey was conducted for students in methods for teaching *Artistic Expression* at nursery school and kindergarten. In this survey, we confirmed the students' understanding of the contents of the study of childcare. As a result, I found that the students' thinking about *beauty* was limited and I thought that more learning was necessary about *shape* and *image*. Based on this fact, we clarified the need to focus on class improvement so that we can be more conscious of components such as *balance, symmetry, proportion, rhythm, harmony, perspective, movement, accent, gradation and contrast*.

1. はじめに

保育士・幼稚園(保育)教諭養成課程において、受講者は様々な教材に触れて、その可能性を確かめながら、子供と関わる準備を行っている。造形活動に関する学習は「表現」の領域に関わってねらいと内容の構成を理解し、指導の知識と技能を備え、保育を構想する方法を身につけることが求められている(文部科学省2017)。また、生活及び遊びに関する援助に必要な具体的な方法及び技術の習得が求められている(厚生労働省2018)。

実際の授業では、各回テーマを追いかけて段階的に造形への親しみを豊かにしている。造形の本質を見極めて幼児・児童に向き合うためには、事前学習を行い感覚的に素材と現象を見極め教材の留意点など確認する必要がある。

子供の「創造性」を豊かにするための、「豊かな感性や表現力」と将来の社会に必要とされる「造形力」を養うことは、造形の本質及び特性を十分に把握することから始まる。造形の豊かさは、学習から一歩先に踏み込んだところで確かめることができる。ある程度の質を要し、一定の時間を過ごす活動を経験することで自己表現が獲得されると、筆者は考えている。また、作品あるいは教材として創作されたモノが目の前に現れ、行為や所作の実体として在ることにその価値を認めることができる。

T体育短期大学児童教育学科は、平成30年度より保育士養成課程を創設した。初年度は、73名が入学し保育士資格・幼稚園教諭免許取得希望者は、6月に「施設・保育所見学」、9月に「幼稚園実習」を経験している。造形領域では前期に開講した「図画工作」で作品制作を繰り返し経験して、造形の基礎

知識と基礎技能を確認している。現在(11月)、後期日程となり「保育内容指導法(造形表現)」が全15回の半数を折り返し、指導計画の作成を経て模擬保育の実践・省察という流れになっている。前半では7種の演習活動を用意し、領域のねらいと内容を感覚的に確かめた。発達の実際を踏まえた活動計画を作成できるよう留意点の学習を併せて行っている。

本研究の目的は、この「保育内容指導法(造形表現)」演習で何が学べていたのか、その中から円滑でない学びを把握し改善点を見出すことである。加えて、前期の学習や実習経験を得た学生が「造形遊び(活動)」をどのように意識しているのか、これまでの経験などを含めて把握し、授業計画の参考としたい。こ

れも、課題が見出されれば同じく改善点を検討する。

受講者自身、幼児から児童期に繰り返し経験してくる素材や技能を取り扱うことから、それを改めて捉え直す取り組みが必要とされている。形や色に関しても、既視感を拭えずに新鮮な感覚で演習ができずに終わるケースも予測できる。学生らしく積極的に取り組むよう努力していると思うが90分を単位とする授業形態により、始まって程なくすると片付けることとなった場合、深まることなく断片的な経験にとどまるケースもあると想定できる。しかしながら、長時間に渡って、継続的に取り組むほどのゆとりはないため、効率よく学習できるような配慮を追求する必要がある。

表-1. 指導計画の導入で行った7つの演習活動概要と指導内容

		演習活動概要	主な指導内容
1回目	カラー シャボン玉	シャボン玉を、作成(PVA、洗剤、ぬるま湯)して、絵の具で色彩を与えたシャボン玉を紙に定着させる遊びの中で、現れる表現内容を確認する演習。	領域表現のねらいと内容を確認し、造形表現の特性について考え、シャボン玉の演習に移行している。感覚を生かして、形、色、音、空間、イメージを楽しむことについて考察を促している。
2回目	自然素材の コラージュ	素材に関する説明の後、近隣の自然保護区に出向き35分程度の散策を行い、枝・落葉・木の実・石を収集する。その後教室に戻り、並べて遊び、台紙に接着固定する演習。	散策では集める・選ぶことを課して、自然との対話を促している。幼児の視点から素材にある面白さに気づいて、遊びながらイメージに発展させる体験を促している。
3回目	うどん粉 絵の具演習	グルテンを除いた小麦粉を水に攪拌し加熱して、食紅を混ぜて絵の具を作成する。絵の具を、アクリル板や紙に広げて感触を確かめながら、造形を感覚的に捉える演習。	フィンガー(ボディ)ペイントの特性について理解を求め、実際の活動を通じて教材の特性と、造形表現の内容について学習を促している。
4回目	幼児の描画 (ロールプレイから)	2歳児の造形表現について確認し、幼児と保育者の双方の視点に立って役割演技を行っている。2歳児の造形的な表現を体験し、その2歳児と対話する保育者を演じる演習。	2歳児役は、ちぎり絵で丸い形で紙芝居を作り保育者に見せる。保育者役は、幼児との直接対話を想定して紙芝居から内容を読み取る。目線を作り言葉を選んで対話することを促している。
5回目	点と線を遊ぶ	3歳児を想定し、遊びの中で出会う形や色と、内面に起こるイメージに対する言葉による援助を考察している。3×6尺程度の紙を用いて、ドロッピングで点描、音楽を聴いて線描する演習。	点描では高い位置から絵の具を落とすように促し、線描では音楽に全身を同調させて身体で描くよう促している。3歳児の造形表現を想定し、見立てと物語の展望を課している。
6回目	フィンガー ペイント	4歳児を想定し、言葉の発達にあわせて多様な造形性を提供する必要性について説明している。市販の指絵の具を用い、野菜スタンプ、ローラー遊びを展開する演習。	形や色の多様な姿を実現するアイデアに気づくように促している。また、身体性を生かした取り組みを促し、結果として生まれる形や色を観察し、教材の特徴把握を課している。
7回目	カラー粘土	5歳児を想定して、構成して遊ぶ姿や表現の個人差を説明している。複数色の紙粘土を準備して、造形的な活動をどのように提供するのか、教材研究を経てねらいと内容を考える演習。	紙粘土の特性を説明し、形や色の扱いを5歳児の視点で捉えることを促している。領域表現のねらいと内容を確認して、紙粘土で実現可能な教材を展望することを課している。

2. 研究方法

2-1. アンケート調査について

2-1-1. 「造形遊び」をどのように捉えているか。

保育園・幼稚園・小学校と、これまでも学びながら造形遊びに親しんできた受講者に「造形的な遊び」の記憶がどの程度あるのか。保育者・教育者を目指す受講者が、造形表現に関する演習授業の中でどういった内容を学べたのか、「造形遊び」と授業で行った演習活動の内容に関する受講者の考えを質問する。

質問項目

- ①『造形的な遊び』と聞いて思いつく遊びは何ですか。
- ②造形的な遊びは、どのくらい楽しいですか。
- ③大学で学ぶ以前、造形的な遊びに親しんだ時期はいつ頃ですか。
- ④そのころ、遊びの中で形や色に気が付くことはありましたか。
- ⑤(あると答えた方)それは具体的にどのような場合でしょうか。

領域表現を学ぶことから、「楽器を奏でる」、「歌を歌う」、「身体を動かす」、「お話する」、「絵を描く」、「工作する」を比較して造形表現をどのように捉えるかを質問する。

質問項目

- ⑥あなたの好きな順に順位を決めてください。
- ⑦あなたにとって表現しやすい順に順位を決めてください。

2-1-2. 「7種の演習」をどのように学んでいたか。

演習を通じ、「楽しさ」、「形」、「色」、「音」、「イメージ」、「手触り」、「美しさ」、「面白さ」について確かめることができたかどうかを質問する。8つの言葉は、領域表現のねらいと内容に使われる語彙より造形演習に関連する事項として選んだ。「動き」「言葉」について候補にしつつ見送ったが、保育の構想及び模

擬保育の学習場面で調査したい。

質問項目

- ⑧ここまでに取り組んだ活動で確かめることができた内容は次のうちどれですか。
- ⑨『造形遊び』の授業として実践したい教材の順で順位をつけてください。

2-2. 調査対象者及び実施日・実施場所

対象者:T体育短期大学児童教育学科「保育内容指導法(造形表現)」受講者63名(平成30年度後期開講)の中から単位取得見込みのある者52名より回収

実施日:平成30年11月15日

実施場所:T体育短期大学4号館造形室

2-3. 倫理的配慮

本調査の実施においては、研究の趣旨説明等を行い、調査・研究への同意を承諾してもらった。調査票は無記名とし、結果の集計を行う。なお、本調査は学内研究倫理委員会の審査を経たものである。(研倫審・平30-22号)

2-4. 演習内容の位置付けと授業の流れ

「保育内容指導法(造形表現)」は、演習科目(1単位)である。よって、各回とも演習活動を主体とする構成としており、1回目から7回目を、ねらいと内容の確認、造形活動の特性と指導の留意点を学ぶ機会に位置付けている。5回目から7回目は年齢に応じた指導の留意点と配慮事項を学ぶ機会に位置付けている。5回目には、指導案の説明を行って5回目以降の演習を基礎に指導計画の作成を促している。以下は、シラバスに示した授業計画である。

- | | |
|-----|----------------|
| 1回目 | 造形表現の特性 |
| 2回目 | 遊びと造形表現 |
| 3回目 | 身体感覚の発見と造形の価値 |
| 4回目 | 自己理解と他者理解 |
| 5回目 | 子どもの造形表現の発達(1) |
| 6回目 | 子どもの造形表現の発達(2) |

- 7回目 子どもの造形表現の発達(3)
 8回目 指導のねらいと保育者の役割・評価の在り方
 9回目 指導計画の作成と様々な援助・留意事項
 10回目 子どもの経験や様々な表現を造形に結びつける学びの展開
 11回目 創造性を育む環境の構成
 12回目 保育の構想と模擬保育I
 13回目 保育の構想と模擬保育II
 14回目 保育の構想と模擬保育III
 15回目 保育の構想と模擬保育IV

2-5. 手続き

自由回答の①及び⑤は、現れた関連語彙と文章が示した「造形的な遊び」の内容を抽出しその件数を集計した。単一回答の②③④は、単純集計を行い順位付けした。数値回答の⑥⑦⑨は、受講者の関心の高さについて、順位を軸に集計した。

複数回答とした⑧は、学習内容を軸に集計し順位付けした。

3. 結果と考察

表-2. 『造形遊び』と聞いて思いつく遊びは何ですか

	件数
粘土(紙粘土、油粘土、土粘土)	41
絵を描く(お絵描き 絵画)	17
絵の具(絵の具遊び)	13
工作(プラスチック、廃材、牛乳パック、紙、ダンボール、新聞紙)	13
作品を作る(粘土、木、箱、好きな物、廃材、想像)	12
折り紙	9
シャボン玉	8
自然(花、動物、落ち葉、松笠)	4
画材(クレヨン、クレパス、ペン、色鉛筆)	4
切り絵	4
泥遊び(泥団子、砂場)	4
積み木	3
廃材	3
図画工作	3
スタンプ	2
発泡スチロール	1
	141

3-1. 「造形遊び」をどのように捉えているか?

3-1-1. 粘土の経験について

質問①の結果に示された通り、受講者の79%が「粘土」と回答した。前期の「図画工作」で、油粘土を用いた立体造形の導入方法と紙粘土に絵の具を混ぜた寿司制作、テラコッタを用いた土鈴作り(焼成)を演習している。今回7回目に市販のカラー粘土を用いた演習を行っており、アンケート直近の内容という状況から影響したと見ることもできる。「粘土遊び」が多数を占めたこと自体は、自然な結果である。次は、「絵を描く」「絵の具」と続いている。絵を描くのか、絵の具で遊ぶのか、この2つの表現の差が認められ、内容が異なることから分けているが、絵の具としてみれば26件(50%)となる。これに続く、「工作」「作品を作る」についても合わせると25件(48%)となる。以下に続く題材も、前期後期で取り組んだ内容が概ね出現している。

「粘土」の活動要素は、「作品を作る」「泥遊び」にも含まれており、今回の回答では多数を占めている。ここまで20回演習を行って「粘土」に3回(15%)触れていることを踏まえると、色濃く「粘土遊び」が記憶されていることが伺える。受講する前に、幼少期に楽しく学んだ経験があることは、造形体験の質を高める一つの踏み台になると思われる。また、「粘土」に触れることが、新鮮な造形感覚を得られるならば、主体的に取り組む意欲の喚起が期待できる。粘土教材を表現の本質を確かめる導入に近い授業回や、造形の特徴を改めて捉え直す授業回など、ねらい内容の理解を促すために有効であると考え、題材の入れ替えが検討できる。

今回集計した中で演習していない遊びは、「積み木」と「切り絵」である。このうち「積み木」は現在の演習に不足する内容となり、項目の一つとして次年度に向けて検討すべき題材として考えたい。幼児・児童期の遊びとして、形や色彩に関心を大きく育て、創造性を育む題材であることは広く知られている。積み木を話題として幼児の造形表現のタイプを説明することがあり、造形的な視点から積み木について考えることは有効である。様々な素材を積み木のように立体的に並べて、現れ来るイメージと向き合うというよう

な経験は有効であると思われる。

「切り絵」は、七夕飾りや紋切りなど興味関心を高める魅力的な題材である。しかしながら、「切り絵」は安全指導や教材研究が必要で題材として複合的である。活動内容を知識と技能で支えることから、幼児・児童が主体的な造形に取り組む幅が狭くなる可能性もある。この観点から、導入時でなくその後の教材研究の題材として相応しく感じられる。

3-1-2. 領域表現と造形遊びの成果

質問②では造形遊びにどのくらい楽しさを感じているかを質問して、「とても楽しめる」と「まあまあ楽しい」

で41件(79%)、「ふつう」が10件(19%)、「あまり楽しくない」が1件(2%)という結果である。造形遊びに、積極的に向き合う受講者の姿が確かめられる。

質問③～⑤では、大学入学以前の「造形的な遊び」の記憶を辿ってもらった。まず、造形遊びに親しんだ時期として、「幼稚園・保育園」から「小学校低学年」までが半数を超えて選ばれている。「幼稚園・保育園」と「小学校低学年」の両方を選んだケースが24件(46%)である。「幼稚園・保育園」と「小学校低学年」が選択されないケースは8件(16%)で、どの時期にも選択がないケースは1件であった。「中学校」、「高校」のみ選択されるケースも3件ある。「中

表-3. 造形的な遊びは、どのくらい楽しいですか

	件数
とても楽しめる	29
まあまあ楽しい	12
ふつう	10
あまり楽しくない	1
正直にいうと楽しくない	0
	52

表-4. 大学で学ぶ以前、造形的な遊びに親しんだ時期はいつ頃ですか

	保育園 幼稚園	小学校 低学年	小学校 高学年	中学校	高校	
保育園・幼稚園 ～ 中学校						9
保育園・幼稚園						8
保育園・幼稚園 ～ 小学校3年生						8
小学校1年生 ～ 小学校3年生						7
小学校1年生 ～ 小学校6年生						5
保育園・幼稚園 ～ 小学校6年生						5
小学校4年生 ～ 小学校6年生						3
中学校						2
保育園・幼稚園 ～ 高校						2
小学校4年生 ～ 中学生						1
高校						1
ない						1
	32	36	25	14	3	

表-5. 具体的にどのような場合に色や形に気がついたのでしょうか

	件数
絵の具の色を混ぜている時	14
主体的に活動している時	4
物(形)を見て描いて(作って)いる時	3
	21

学校」、「高校」を選択したケースが14件あり、そのうち12件は質問②で「とても楽しめる」を選択している。質問②で「あまり楽しくない」と回答した受講者は、「保育園・幼稚園」のみ選択していた。

「造形的な遊び」の時期に、形や色などの造形要素について意識があったかどうかの質問④に対しては、23名があると答えており、質問⑤でそのうちの21名から具体的な記述を得ることができた。結果として形よりも色に対する関心が現れて、混色による色彩の変化について数多く記述されていた。形について記述例が少なく、2例となっている。幼児期、児童期を通じて、造形と言葉を結び付けてイメージを確かめる支援が必要とされることから、改めて形を捉えなおして、具体的な支援の手立てになるよう「形」に関わる観点を育てる必要が感じられる。②における「造形遊び」の楽しさと形や色などの「造形要素についての意識」の有無に関係性を見ることはできない。

小学校の全学年で「造形遊び」が領域の一翼を担うようになって久しく、幼稚園と接続して学校教材に定着し発展している状況がある。上級学校まで楽しく学べている様相はそれ以前の学習が豊かであったと考えるのが自然である。概ね受講者が造形的な遊びの経験を有していることはわかるが、造形の質と密度には大きく個人差が生まれていることに留意しなければならない。

3-1-3. 造形活動は5位と6位

質問⑥と⑦では、表現全体から捉えた場合に、受講者が造形活動をどのように捉えているのかを探る目的がある。日頃より、受講者が絵を描くこと自体に戸惑う姿、どのように表現すれば良いのかを聞く姿、説明がないと遊びの方法に気付かない姿などがあることから、予測した通り他と比較して5位6位の割合が多くなっている。質問②では、造形活動を楽しむ姿、造形活動に前向きに取り組む姿勢が読み取れるので、根気よく支援をしなければならない。

それでも、1位2位に「絵を描く」「工作する」を選ぶケースが10%程度あり、質問の②～⑤で見られる「造形の質と密度には大きく差が生まれている」傾向をここでも確かめることになった。質問⑥で1位2位に造形

活動を選んだ受講者は、質問②で、「とても楽しい」を選んでいる。質問⑦で1位2位に造形活動を選んだ受講者は、質問②で「まあまあ楽しめる」「普通」なども混ざり3項目に均等な分布を示した。「楽しい」と「好き」は重なるが、「楽しい」と「表現しやすい」は必ずしも重ならないことがわかる。

本来幼児の表現は総合的で活動設計も相応の配慮がなされるものである。時には単一領域に偏って追求することもあるかもしれないが、現場でそのような傾向が続くことは考えにくい。このことから、造形領域に対する関心や学びやすさの度合いとして質問⑥⑦の結果を配慮事項として捉えたい。演習活動のラインナップや、模擬保育の活動グループの人選を行う参考にしたい。今回は無記名によるアンケートのため、直ぐに反映することはできないが、前期科目の評価に沿って配慮することは可能である。

表-6. 以下の表現方法をあなたの好きな順に順位を決めてください

	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	第6位
楽器を奏でる		3	7	18	13	11
歌を歌う	1	18	13	6	7	7
身体を動かす	30	13	8	1		
お話しする	13	9	10	10	6	4
絵を描く	3	4	5	8	13	19
工作する	5	5	9	9	13	11

表-7. あなたにとって表現しやすい順に順位を決めてください

	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	第6位
楽器を奏でる		3	7	19	10	13
歌を歌う	2	9	14	8	12	7
身体を動かす	25	15	6	1	2	3
お話しする	12	15	5	11	3	6
絵を描く	6	4	12	8	11	11
工作する	7	6	8	5	14	12

3-2. 演習で学んだ内容に関して

3-2-1. 「7種の演習」をどのように学んだか？

図-1は、7種の演習活動で受講者が学べたと考える内容とその件数を表している。

学びの内容の選択件数最大値(52名×7項目)はそれぞれ364件で、内容ごとの件数と割合は以下の通りである。

楽しさ	254件	69%
色	191件	52%
面白さ	165件	45%
形	153件	42%
イメージ	144件	39%
手触り	124件	34%
美しさ	52件	14%
音	48件	13%

「楽しさ」が「色」「面白さ」「形」「イメージ」「手触り」の順番で関連している。この状況に大きく問題は感じられない。そして、「手触り」から大きく離れて、「美しさ」と「音」となっている。「手触り」「美しさ」「音」について、選択が限定的である。

「美しさ」を見出す受講者が少ない状況は、改善すべき課題である。画面に生まれる色彩や現れる形態、空間には美しい姿を認めることも不可能ではないが、それを美しいとする判断まで受講者が至っていないことがわかる。造形的思考によって、形や色が備える姿から内面にある美しさを重ねて判断もできるはずだが、それを造形感覚として確かめる経験の質や積極的に取り組む姿勢がさらに必要ではないだろうか。あるいは、ことばの問題として、「美しさ」を「きれい」や「感動」などに関係させた方が良いのだろうか。「美しさ」を認識できるような改善策として、色・形・イメージ・手触り・音などに「美しさ」を感じたかど

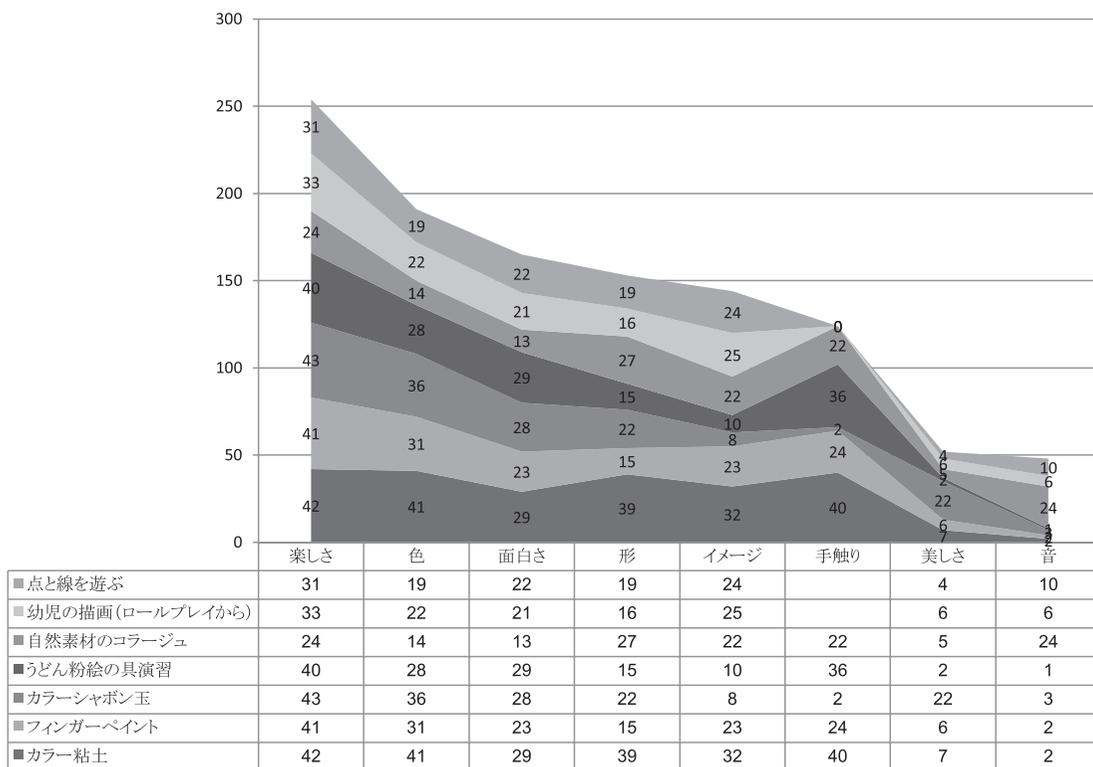


図-1 ここまでに取り組んだ活動で確かめることができた内容は次のうちどれですか

うか振り返る機会を提供することも必要に感じられる。同じく「手触り」や「音」も含めて、活動中の働きかけを増やさなければならない。

演習活動の導入段階で、テーマなど表現内容に関する枠組みは提示していない。どんなことを表現するのか、活動の中で「イメージ」を育むのは受講者本人とした。結果として「イメージ」の選択は、1回目8件・2回目22件・3回目10件・4回目25件・5回目24件・6回目23件・7回目32件という状況になった。最後に少し増えたので成果として見ることもできるが、課題とする方が自然である。この最大値32を52まで引き上げる取り組みが残りの授業回に求められる。各内容に選択のなかった受講者数の集計は以下の通りである。

楽しさ	0名	0%
色	1名	2%
形	2名	4%
手触り	2名	4%
面白さ	3名	5%
イメージ	7名	13%
美しさ	21名	40%
音	34名	65%

変わって、演習活動ごとの選択件数最大値はそれぞれ416件(52名×8項目)で、活動ごとの件数と割合は以下の通りである。

カラー粘土	232件	55%
フィンガーペイント	165件	39%
カラーシャボン玉	164件	39%
うどん粉絵具	161件	36%
自然素材	151件	36%
幼児の描画	129件	31%
点と線を遊ぶ	129件	31%

カラー粘土

「楽しさ」から「手触り」まで安定して選択があり、7種のうち最も多い。その理由として「色」と「形」の選択数が近いことに着目したい。視覚情報は「色」と「形」

であるから、この2つが揃って確認できる演習が望ましい。造形性を軸に他の内容と関連付けられるのが自然な流れである。しかしながら、造形表現の理解を目指す最後の授業回で「美しさ」の選択が少ないことは非常に残念である。残りの授業回で補わなければならない。

フィンガーペイント

「形」の選択が少なくなっている。3種類の教材を通じ、「色」と「形」の特徴についてそれぞれ観察し記録するというテーマであったため、ここには改善点を見出す必要がある。後日提出されるポートフォリオには、活動記録と考察が記述されるため、活動後に感覚を手際よく記録することが望ましい。活動直後、簡単に振り返ることができる仕組みを導入する必要があると感じられる。

カラーシャボン玉

「美しさ」の選択が22件あり、7種で突出して多い。これに関連しているのが、22件中18件選ばれている「色」であった。活動のテーマの一つに「光を感じて」と口頭で伝え活動していたことも関連しているのかもしれない。フレッシュな液でシャボンの滞空時間が長いため、虹色が球体表面に作る形態を確かめることができたのではないかと。

「イメージ」との結びつきが若干少なく、「手触り」の選択が少ない。造形表現の特性を学ぶとした1回目の演習内容としては、学習できた内容のバランスが悪い。継続して行う場合には、活動テーマに「形」「イメージ」「手触り」なども強調する必要がある。

うどん粉絵具

手指の感触を捉え直すテーマからすれば、「楽しさ」「手触り」が重なってくることは、望ましい結果と言えるが、造形本来の特性からすると、「色」「形」がもう少し増えてほしい。

「イメージ」との結びつきも少なく、「形」と「イメージ」の結びつきに着目して、活動テーマに「形」と「色」の結びつき、造形性との出会いと「イメージ」の結びつきを丁寧に説明する必要がある。

イメージを強調する「幼児の描画」(副題/自己理解と他者理解)を早い授業回に移動することも検討できる。

自然素材のコラージュ

散歩(矢川緑地)をしてみると言って受講者も楽しみにしていたと思うが、当日は秋雨が降り気温も下がりコンディションは最悪であった。さらに虫除けの準備が悪かったのか、虫たちが雨を避けて森に集まっていたのか、たくさんの蚊に食われて痒かったとのことである。晴れて入念に虫除けをした場合、学習はかなり豊かになったと思われる。

「形」「楽しさ」「音」「イメージ」「手触り」に選択がまとまり、その後に「色」が続く。「色」は、当日が暗かったのと濡れて色が重くなっていることから、感動は少なかったと思われる。「音」の選択件数が予測の通り多くなった。これが表現に結びつくことを期待することができる。

幼児の描画

「楽しさ」「イメージ」と続き「色」「面白さ」「形」が続いている。7種では、選択件数が最も少ない。

7種の演習で唯一役割演技を造形活動に重ねているが、造形の内容は確認できたという結果をまずは受け止めたい。造形性とイメージの狭間にある幼児の内面をテーマとしており、重要な位置付けの演習となった。

「手触り」の選択がない。デンプン糊の扱いで、指先を使って薄くのばす、のりの厚みを感じその厚みを加減せよ、と複数回指摘をしたが今回の受講者には十分に響かなかったようだ。これは受講者に学習姿勢を改善してもらいたい。

点と線を遊ぶ

「楽しさ」「イメージ」「面白さ」と続き「形」と「色」が続いている。7種では、選択件数が最も少ない。

線の筆圧やストロークなど手の感触というのは豊かに関連するはずだが、「手触り」の選択がない。受講者の意識が重ならなかったと思われるので、活動テーマに「手触り=筆圧=筆触」を強調する必要がある。

る。

「音」に関して、この演習でツィゴイネルワイゼンを聴きながら線描を行っており、多く選択されると予想したが結果は異なっていた。描くことに意識を傾けているのであれば良いことである。

ここでわかることは、受講者が演習を通じて領域表現の内容を学べたかどうかの感想である。演習にはそれぞれ、活動の記録を課して考察を促している。しかしながら、その場ではなかなか記録できず見過ごすケースが見受けられる。今回はアンケートという形で、選択肢のどれかに必ず選択しており、日常の配布資料などに自己評価欄として盛り込むべき内容と感じられた。記録・考察を展開させる契機として、予め評価項目を提示することは造形感覚の言語化に手助けとなるであろう。

造形感覚を言語化することは、「ことば」による直接的な援助に結びつく手掛かりとなり、感覚をどの程度確かめているかを把握するためにも有効である。

なお、全く選択がなかった件数は、演習ごとに以下の通りであった。欠課によるものである。

カラーシャボン玉に選択がないケース	4件
自然素材のコラージュに選択がないケース	4件
うどん粉絵の具演習に選択がないケース	2件
幼児の描画に選択がないケース	2件
点と線に選択がないケース	5件
フィンガーペインティングに選択がないケース	3件
カラー粘土に選択がないケース	2件

3-2-2. 演習活動の価値

図-2の棒グラフ色が明るい上位、暗いと下位で、色分けされた棒グラフの長さが件数を示している。明るい色が多い演習内容が、実践しやすいと受講者は捉えている。

この後、指導案の作成を経て活動設計を演習し模擬保育などを予定している。「ローラープリント」「クレヨン遊び」「紙工作お面作り」「粘土遊び」を題材設定して、素材を準備している。

調査結果を受けて「粘土遊び」を皮切りに進めるこ

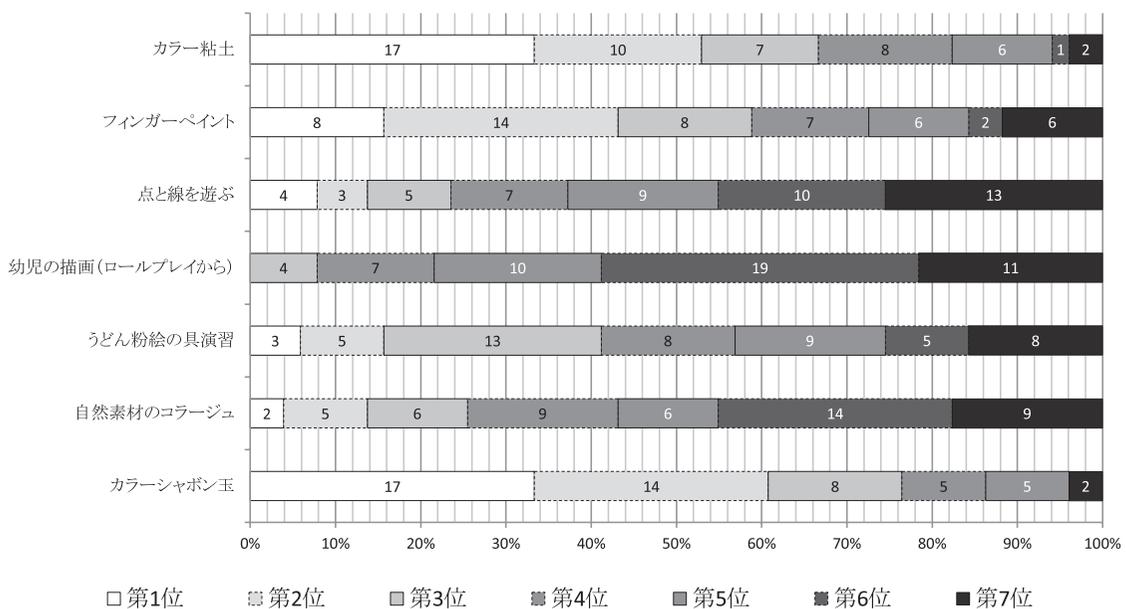


図-2 『造形遊び』の授業として実践したい教材の順で順位をつけてください

としたい。次に「クレヨン遊び」「ローラープリント」「紙工作お面作り」という順で進めることになる。

4. 改善点について

教材の選定や、活動内容の構成において、受講者の捉え方を把握することで改善点を見いだすことが目的であった。今回調査した結果、以下の点が確かめられた。

- ・ 受講者は、造形活動を必ずしも得意とはしていないが、前向きに学ぼうとしている。
- ・ 造形的な遊びに関する、受講者の捉え方は様々である。
- ・ 造形演習における受講者の反応は素直で、少しずつ、表現に関わる造形要素を見出せるように変化しているが、形やイメージを捉える力が弱い。
- ・ 学習の中で、美しさや音を捉えることが少ない。
- ・ 色彩や形など造形要素が豊かなほど、受講者は取り組みやすい。

改善すべき方策として、以下のことが挙げられる。

- ・ 形について、『幼稚園教育要領「表現」内容(1)に、「音、形、色、手触り、動き」とあるが、それぞれの 特徴を捉えて創造的に学ぶのは異なる科目に分かれてからである。領域や分野を超えて集大成を進めるにあたり、造形表現から環境を整えようとすると、アイデアに対して形を与えることに絞られてくる。』(三好ら2018)で指摘しているように、表現内容(イメージ)を示す重要な役割を担うものである。音や動き、色と重なる総合的な観点から、均衡、対称、比例、律動、調和、遠近法、動き、重点などの構成要素に大きく関わる要の役割を持つ。イメージとの結びつきも豊かに実現することから、「構成遊び」を演習課題のテーマで強調することが望ましい。
- ・ 演習で学ぶことの意味や価値を問う場合に、実際の受講者の感覚が、如何に反応し感じ取っているかを自ら確かめることは重要である。活動内容を自ら推し量ることに導くことができる。よって、今後は

ねらいと内容に基づくキーワードを設定し、活動・指導を展望する教材研究の振り返りから自己評価を記録するように、配布資料を改善することができる。

- ・「美しさ」は、幼稚園教育要領などで「領域表現ねらい(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。」(文部科学省2017)と掲げられる概念の一つであり、造形領域の根幹でもある。受講者の学びがここに至らないことは、大いに反省をして残りの授業回で修正をしなければならない。受講者は「色」については造形としての捉えが更新されているが、「形」と「イメージ」に関して改善点を有している。それが「美しさ」に関連している可能性が極めて高く、階調や対比、なども加えた構成要素を強調して演習を指導することが涵養である。

楨英子(1998年):保育をひらく造形表現 萌文書林
三好優美子・渡邊洋・長谷川千里・柳田憲一(2018):
総合表現(創作オペレッタ)における表現科目の
連携:「音楽」「造形表現」「身体表現」の観点から
東京女子体育大学 東京女子体育短期大学
紀要53号 p. 55

文部科学省(2017):幼稚園教育要領 第2章表現
ねらい(1)

文部科学省 厚生労働省(2017):幼保連携型認定こ
ども園教育・保育要領

文部科学省(2017):小学校学習指導要領

村石理恵子(2018):保育者養成における幼児期の
生活と遊びの理解:学生自身の遊びの体験を活か
す授業のあり方 東京女子体育大学 東京女子体
育短期大学 紀要53号

5. 今後の課題

改善点の考察を経て、以下2点の課題を確認することができた。

- ・この後で展開する、保育を構想する学習、模擬保育を通じた保育に必要な技能を身に付けるための演習に関して、イメージと言葉の結びつきを調査する必要がある。
- ・造形性の捉え方を徐々に育成し、質を高める必要が感じられるため、造形性とイメージ、構成要素とイメージに関する調査が、今後の授業改善に向けて必要とされるだろう。

引用・参考文献

新井哲夫・石賀直之・大泉義一・岡照幸・刑部育子・
郡司明子・小泉薫・小池研二・立川泰史・名達英詔・
松原雅俊(2017):美術教育における授業研究の
すすめ方 美術科教育学会叢書第0号 美術科
教育学会授業研究部会

厚生労働省(2018):指定保育士養成施設指定基準
第2-5教育課程-(1)基本的事項-(4)-イ

厚生労働省(2017):保育所保育指針

教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会
(2017):教職課程コアカリキュラム p. 8